

声を失った少女

キルレイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めて書いたssで、ssnoteに投稿していた台本形式です。優しいリヴァイです。

将来的にオリジナルとして書き直したいと思っています。

4話で完結です。

4話

3話

2話

1話

目次

65

44

25

1

1話

私は家族に裏切られました。

私はお金の為に売られました。

私は貴族の家で監禁されています。

私は暴力や拷問をされました。

私は逃げようとしても鎖があります。

私はなぜ生きているのでしょうか。

私に生きる意味はあるのでしょうか。

ガチャ　ギイイ

貴族「チツ、今日も嫌な目に遭った。上にはペコペコ頭を下げ、嫌味を言われて、腹立つな……こいつでスツキリするか」ドゴツ　バゴツ　ゲシツ
殴られたり蹴られたりしています。いつも通りの日常です。

貴族「足りねえな。やっぱ拷問するのが手っ取り早いな」スツ

ジヨキン

今日は爪を剥がしています。丁度生えてきたからでしょうか。明日は皮膚を焼く日

だと思われれます。

貴族「おお…今日は1段と綺麗に剥がせたな。今日はこれ以上やらないでおこう、気分がいいからな」スタスタ

ガチャ ギイイイ

これを毎日繰り返し返しています。いつどんな時でもやってます。でも今日は最後の日でした。

ー次の日ー

ドタバタ バンバン ドサツ

今日はやけに物音がします。まだ誰もここに来てません。何があつたのでしょうか。

ガチャ ギイイイ

?いつもと足音が少し違います。貴族の靴じゃない気がします。誰なのでしょう。

憲兵A「あそこに誰かいます。鎖で繋がっているようです…：：：周りには拷問された後です…：」

憲兵B「君、名前は？」

この2人の男の人がそう尋ねました。服は見たことがありません。何か棒みたいな物を持っています。新しい道具でしょうか。そもそも何をしているのでしょうか。殴つてきません。名前を聞いています。名前つてなんですか、と尋ねたいのには私は言え

ません。黙ることしか出来ません。

憲兵B 「まるで無反応だ…」

憲兵A 「6歳くらいですかね」

憲兵B 「とりあえず本部に連れていこう…まずは鎖を拳銃で壊すか」バンバン

本当に何をしているのでしょうか。鎖を壊してくれています。意味が分かりませんが、鎖を壊してくれても私は立つことが出来ないのです。鎖で立てなかつたので立つ経験がありません。座ることしかできません。

憲兵A 「……どうしたんでしょうね」

憲兵B 「立つ筋肉がないのか、立ったことがないのかもしれないかも」

憲兵A 「僕が運びますね」

憲兵B 「ちよつと待て……君……あ” って言ってくれろ？」

”あ” と言えればいいのでしょうか。ですが私は口パクしかしませんでした。なぜなら私は声が出ないのですから。

憲兵B 「声……出ないのか……」

憲兵A 「急いで医者に見てもらいましょう」ガシッ

憲兵A 「!？」

憲兵B 「どうした？」

憲兵A 「重さが見た目に反して、全然ありません！」

憲兵B 「急ごう」 タタタタ

憲兵A 「ハッ！」 タタタタ

イシャとは何でしょうか。私はどこに行くのでしょうか。私は何もしないで良いのでしょうか。そんなことを考えているとフワフワな何かの上に乗せられました。

憲兵A 「呼んできます」 タタタタ

憲兵B 「頼んだ」

ここはどこでしょうか。新しい場所でしょうか。何をされるのでしょうか。

憲兵A 「呼んできました」

医者 「その子かい？」 スタスタ

憲兵B 「はい拷問された形跡がありましたそして喋れないみたいです」

医者 「!!拷問されていたのか…とにかく調べてみよう…」

そう言つて白い服の人は私の身体を触っています。

—————

—————

—————

—————

医者「かなり危なかったよ。半分ぐらいの臓器はめちやくちやだし、骨も折れてるところがある。生きてるのが奇跡だ。声は簡単に言うとストレスが原因だね」

憲兵A「そんなことあるんですか？」

憲兵B「これは見たことないケースだな…」

男の人達が何か話しています。私の話でしょうか。私は今白い布みたいな物を巻いています。ベッドで座っています。

憲兵B「リハビリとかは医者に任せておけ。俺達は帰るぞ」スタスタ

憲兵A「…はい」スタスタ

あれから1週間歩く練習をして、歩けるようになりました。今日は医者の人と街に行きます。

医者「楽しいかい？」

タノシイとはなんでしょうか。とても疲れます。買いたい物もありません。そんなことを思っていると気になるものがありました。

医者「調査兵団が帰ってきたみたいだね…今日も成果はなかったみたいだ」

何故か興味が引きましました。私は走っています。走って走って辿り着きました。茶色い何かにぶつかります。

エルヴィン「？君は…」

医者「すいません…事情があつて初めて外に出ていて、色々なものが物珍しいみたいで…」

これはなんでしょうか。医者の人に指を指します。

医者「これは馬つていう動物だよ」

これは馬というのですか。不思議な生き物です。触り心地が良いです。

医者「この子はストレスにより声が出ないみたいで…」

エルヴィン「そうだったんですか」

リヴァイ「エルヴィンどうした…そのガキも」

この人はエルヴィンという名前だそうです。少し小柄な人は機嫌が悪そうです。

エルヴィン「少しな…リヴァイが怖くないのか？」

？どこが怖いのでしょうか。分かりません。殴つてきませんよ。

リヴァイ「…少し興味が出た連れて行つてもいいか？」

エルヴィン「リヴァイがそんなこと言うとは…」

リヴァイ「俺を怖がっていないから殆どのやつは怖がる」

医者「毎週病院に来てもらえるなら構いませんよ」

リヴァイ「ここに乘れ」

私の事でしょうか。リヴァイさんに乗せてもらうことにしました。

——調査兵団本部——

リヴァイ「そういえば名前はなんだ？」

私に名前はありません。必要なかったのですから。私は首を横に振りました。

リヴァイ「ないのか：俺が決めてもいいか？」

私は首を縦に振ります。何故名前を決めてくれたのか分かりません。しかし今思うと恐らくこの時初めて楽しいと

リヴァイ「レイラでいいか？」

嬉しいと感じたのでしょうか。でもこの時の私はそれを知りませんでした。名前をつける意味が分からないので違和感がありました。

レイラ コクッ

この日からレイラという名前前で調査兵団本部で暮らすことになりました。

リヴァイ「俺達の仕事は壁外に行つて巨人の秘密を解明することだ」

キョジン？とは何なのでしょう。私は首を傾げます。

リヴァイ「壁外が分からねえのか？」

レイラ フリフリ

リヴァイ「巨人か？」

レイラ コクッ

リヴァイ「説明するより見た方がいいだろう」

ガチャ

リヴァイ「クソメガネはいるか？」

ハンジ「リヴァイどうしたの？……てゆうか誰？その子」

リヴァイ「事情があつて引き取ることになった名前はレイラ、声が出ない……こっちはハンジだ」

女の人が出てきました。名前はハンジという人です。この人がキョジンを紹介してくれるのでしょうか。少し楽しみと感じたはずです。

リヴァイ「巨人が知りたいとの事だ。実験でもしてんだろ。見学させてやれ」

ハンジ「分かった、たつぷり話してるよ。レイラ、よろしくね」スツ

手を出してきました。叩こうとしている様子はありません。どうゆう意味なのでしょうか。

ハンジ「……あれ……」

リヴァイ「こいつは少し常識外れのところがあるが気にしないでくれ」

ハンジ「そっかー仕方ないね。レイラ、巨人はこっちだよ」

リヴァイ「行ってこい」

レイラ コクツ スタスタ

そこにいたのは大きな裸の人間のような生物でした。これが巨人ですか。驚きました。ハンジさんが話始めました。

ハンジ「巨人は基本的に人間を食べるんだけど省略（座学の範囲）」

私が率直に思ったことは人間に似ていると思いました。目的は殺戮。破壊衝動に似ていると思いました。痛覚がない。私に似ていると思いました。巨人について興味が出ました。

リヴァイ「おい、そろそろ帰るぞ」

もう帰らなければなりません。ハンジさんにもう一度会いたいという意味を込めて手を振りました。

レイラ フリフリ スタスタ

ハンジ「また明日会おうね」フリフリ

リヴァイ「楽しめたか？」

レイラ「…」

あの時は分かりませんでした。ですが今なら答えることが出来ます。楽しかったですよ。

リヴァイ「明日も会いてえか？」

レイラ コクッ

リヴァアイ「分かった、夕飯食いに行くぞ」スタスタ

レイラ スタスタ

果たしてどのような料理があるのでしょうか。病院の料理はあまり美味しくありませんでした。その前は料理の概念がありませんでした。お水だけでした。

——食堂——

リヴァアイ「ここだ」

沢山の人がいて驚きました。今までほぼ一人で食べていたからです。

ザワザワ

アレリヴァアイハイチヨウダヨナ

トナリニイルコハダレダ？

メズラシイ

リヴァアイ「俺の分を分ける、どうせ少ししか食わねえんだろ」

レイラ コクッ

リヴァアイ「これくらいでどうだ」

レイラ コクッ パクッ

とても美味しかったです。感情が豊かだったら泣いていたでしょう。ですが私はあまり食べられません。リヴァアイさんから貰っても、少ししか食べませんでした。

リヴァイ（小動物みたいに食べるな…） ナデナデ

レイラ パクッ

私がパンを食べているとリヴァイさんが頭を触っています。手を頭の上で動かしています。痛くありません。どうゆう意味なのでしょう。この行為をリヴァイさんがすると周りがザワザワしています。

ザワザワ

リヴァイヘイチヨウガアタマヲナデテルゾ!?

アシタハタイフウデモクンノカヨ

ハジメテミタ…

ガチャ

ハンジ「リヴァイ、私も食べてい……………何してんの？なんか変なもんでも食べた？」

レイラ パクッ

リヴァイ「……………何のことだ」

ハンジ「だつて頭撫でてたじゃん」

リヴァイ「俺がそんな事するとも？」

ハンジ「いやだつてリヴァイ「見間違いだ」

ハンジ「でもリヴァイ「巨人を見すぎて幻覚でも見たんじゃないか？」

ハンジ「……」

リヴァイ「……」

シーン

レイラ パクツ

ハンジ「仕方ない幻覚でも見たとゆうことにするよ」(何かあった時にネタに使えるしね)

リヴァイ「当たり前だ俺がそんな事するわけねえだろ」

お話は終わったようです。ゲンカクとはなんででしょうか。そろそろお腹がいっぱいになりました。食べたパンをお皿に乗せます。

リヴァイ「もういいのか」

レイラ コクツ

リヴァイ「俺が食べるまで待ってろ」

レイラ コクツ

ハンジ「そういえば……リヴァイ、一緒に食べていい?」

リヴァイ「レイラはいいか?」

レイラ コクツ

ハンジ「じゃあ早速隣座るね」スッ

ザワザワ

ハンジブンタイチヨウモイルゾ!?

キヨウハナンカアツタツケ

カンブヒトリガクルダケデモメズラシイノニ

リヴァイ「こいつが巨人の話が面白いらしいから、明日も聞きたいと思ってるらしい」

ハンジ「マジで！巨人の良さを分かってくれて嬉しいよ!!楽しみ!!」

リヴァイ「うるせえな黙って食え」

ハンジ「とゆうか今話そう！今!!実は○○○○で○○を」

ハンジさんが楽しそうです。楽しそうに話しています。いえ、この時の私は楽しいを知らなかったので少し違いますね。正しくは興奮しながら話していました。

リヴァイ「おい…行くぞ」ガタツ

レイラ コクツ ガタツ

ハンジ「あ…まだ話したいことが…」

リヴァイ「明日話せばいいだろう今日は他にやる事がある」

ハンジ「そうだったね…ごめんごめん。お風呂は私が連れてくよ」ガタツ

お風呂は聞いたことがあります。医者の人からここに来る時お風呂に入っても大丈夫と言われたのです。

リヴァイ「なら風呂は任せた」

ハンジ「任せられた。レイラ、こっちだよ」スタスタ

レイラ コクツ スタスタ

ー女子更衣室ー

ハンジ「ここでまず服を脱ぐんだよ」ヌギヌギ

服を脱いで何をするのでしょうか。よく分かりませんがとりあえず脱いでみます。包帯も取りましょう。

レイラ コクツ ヌギヌギ

ハンジ「！……大変だったんだね」

何を言っているのでしょうか。どこかおかしい所がありますか。この身体のどこが異常ですか。そういうえばハンジさんの身体はとても綺麗ですね。異常に綺麗です。

レイラ「？」

ハンジ「個室風呂に入ろうかこっちだよ」スタスタ

レイラ スタスタ

ガチャ

ハンジ「身体を洗おうか……この石鹸ってゆーのを使って、身体を洗うんだよ」
シヤカシヤカ

ハンジさんにやってもらいました。

ハンジ「……………痛くない？」

一体何のことでしょうか。どこも痛くありませんよ。

レイラ「？」

ハンジ「そつか…全体を洗ったら水で泡を流すんだよ」シャァ

ハンジさんによってもらいます。少しスッキリした気がします。なぜなら5年ほど身体を洗ってなかったのですから。

ハンジ「レイラはすぐ綺麗な肌だね…怪我が完全に治るといいね」

この人は何を言っているのでしょうか。怪我を完全に治してくれると言ったのですか。なぜ怪我を治すのでしょうか。今まで怪我をするのが当たり前だった私は、この時困惑していたのです。怪我をさせられるのが当たり前だったのです。

レイラ「…」

ハンジ「次は髪を洗おうか。髪は女の子の命なんだって、綺麗にしないとね」

レイラ「？」

女の子の命なら私は死んでいますよ。私はたまたま髪を切られるのです。ですが私は伸びるのが速いので今は腰辺りまであったのです。

ハンジ「レイラの髪の毛は長いから手伝うよ目を閉じててね」ジャブジャブ

レイラ コクツ

目を閉じました。手伝うというより洗ってもらいました。ハンジさんの洗い方はとても気持ちよかったです。

ハンジ 「水で流すよ」 シャー

レイラ コクツ

ハンジ 「もう目を開けても大丈夫だよ。髪の毛も綺麗な黒髪だねえ。美人さんだ」
目を開けてみると確かに綺麗になりました。久しぶりに洗ったからです。

ハンジ 「これを週に1度やるんだよ。資源が限られてるからね」

レイラ コクツ

ハンジ 「じゃあ上がろうか」 スタスタ

レイラ コクツ スタスタ

ガチャ

ハンジ 「このタオルで身体を拭いてね」 スツ

レイラ コクツ フキフキ

ハンジ 「レイラの服は……同じのを着て明日買ってこないかね」

レイラ コクツ ガサゴソ

服は病院で貰ったものを着ました。明日は初めての買い物です。リヴァイさんは来

るのでしょうか。

――兵士長の部屋――

ガチャ

ハンジ「お待たせ。綺麗になったよ……なんでエルヴィンがいるの？」

エルヴィン「少し用事があってな」

リヴァイさんの部屋にはリヴァイさんとエルヴィンさんがいました。何か話していたようです。

リヴァイ「遅かったじゃねえか……服は明日買いに行くのか？」

ハンジ「うんリヴァイも来る？」

リヴァイ「いや、いい」

リヴァイさんは来ないようです。ハンジさんと出かけることになりました。

エルヴィン「その子が噂の子か」

ハンジ「レイラのこと？」

エルヴィン「ああ、リヴァイが頭を撫でた謎の女の子がいると噂になってるぞ。その事で話を聞きに来たんだ」

ウワサとはなんでしょう。頭を撫でていた行為はそんなに珍しいことなのでしょうか。

ハンジ「そういえばレイラの事なんだけど……身体中が傷だらけで痛みが麻痺してるみたい」

リヴァイ「!?」

エルヴィン「虐待か拷問か？」

ハンジ「分からない……本人が声を出せないから何があったのか分からないよ……文字が書けるなら別だけど……」チラツ

文字とはなんでしようか。何かを伝えることが出来るのでしようか。そして私のどこが異常なんでしょうか。

レイラ「？」

エルヴィン「とりあえず疲れているだろうから寝かせるか」

ハンジ「どこで寝る？」

寝る場所はどこでもいいですよ。床でも構いません。

リヴァイ「俺が引き取ったんだ俺の部屋でいいだろう」

ハンジ「ベッド一つしかないよ」

リヴァイ「俺がソファで寝ればいい」

ハンジ「!?リヴァイがソファで寝ていいってホントにリヴァイなの!?なんか変なものでも食べた!」

リヴァイ「削ぐぞ」シヤキ

エルヴィン「落ち着け2人とも、レイラが驚くだろう」

驚いていませんよ。リヴァイさんには殺意がありませんでしたから。そして私はソファアールがいいですよ。私はソファアールに指を指します。

リヴァイ「ソファアールがいいのか？」

レイラ コクツ

リヴァイ「……分かった、布団はお前にやる。そろそろ寝ろ」

レイラ コクツ スタスタ

私はソファアールに横たわりました。フカフカのソファアールでした。すぐに眠ってしまいました。きっと疲れていたのでしょう。

エルヴィン「リヴァイが人に優しくするのは珍しいな」

リヴァイ「……ほっとけないだけだ」

ハンジ「私そろそろ眠くなってきたから寝るねーおやすみー」ガチャ

エルヴィン「俺も寝る。おやすみ」ガチャ

リヴァイ「ああ」

ー次の日ー

リヴァイ「起きろレイラ」

とてもよく眠れました。病院とは違う安心感があったからです。今考えてもよく分かります。

レイラ ムクリ

リヴァイ「おはよう」

レイラ コクッ

リヴァイ「食堂行くぞ」スタスタ

レイラ コクッ スタスタ

ー食堂ー

ハンジ「おつはよーレイラ、リヴァイ一緒に食べよー」

ミケ「俺もいいか？」

エルヴィン「久しぶりに集まって食べるな」

ミケ「そいつが噂の…」

リヴァイ「レイラだ」

ミケ スンスン

この人は誰でしょうか。何をしてるのででしょうか。首筋の匂いを嗅いでいます。そして

ミケ フツ

鼻で笑いました。よく分かりません。

ハンジ「彼はミケ。初対面の人にそうゆうことするんだ。まあ多分深い意味はないと思うよ」

リヴァイ「朝飯食うぞ」

ザワザワ

キョウハカンブガソロットルゾ!!

マタアノオンナノコガイルヨ

イツタイナニモノナンダ

エルヴィン「そういえば言い忘れていたな。彼女はレイラ、事情があつて声が出ない。身内がいないので引き取る事になった」

エルヴィンさんがみんなに説明したようです。皆さん分かつてもらえるでしょうか。私はパンを食べました。

レイラ パクッ

みんな（か、かわいいいいい!!）

調査兵A「よ、よろしくね」

レイラ コクッ

調査兵A（ズッキューン）バタン

返事をしたら倒れてしまいました。どうしたのでしょうか。私になにかしましたか。

レイラ「？」パクッ

みんな グハッ

調査兵B（落ち着け!!

俺はロリコンじゃない

俺はロリコンじゃない

俺はロリコンじゃない

俺はロリコンじゃない

俺は

ハンジ「あちゃー大変な事になったね。出血死する人出るのかなー」

リヴァイ（小動物みたい…）

エルヴィン「思った以上に人気だな」

ミケ「すごいな」

私はパンを食べ終わったのでハンジさんの所に行きました。それにしても不思議です。皆さんはなぜ私を殴らないのでしょうか。聞いてみたいです。

レイラ スタスタ

ハンジ「服買いに行く？」

レイラ コクツ

ハンジ 「分かった、早速行こうか」

ー トロスト区ー

ハンジ 「えーと…確かこの辺に…あった！服屋さん発見！」

服屋さんがありました。初めての買い物です。この時の私はきつとドキドキしていたと思います。

ハンジ 「中に入ろうか」

ガチャ

店員 「いらっしやいませ」

ハンジ 「どれか気になる服はある？」

私にはよく分かりません。首を横に振ります。

レイラ フリフリ

ハンジ 「じゃあ私を選ぶよ」

ー 買い物中ー

ハンジさんに4着ほど買ってもらいました。大変そうに選んでいたと思います。ですが本当はハンジさんは楽しそうに選んでくれたのです。あの頃の私は楽しい感情がまだなかったのです。

ハンジ「じゃあ帰ろうか」

レイラ コクッ

ハンジ スタスタ

レイラ スタスタ ピタッ

帰り道を歩いているとある物を見て止まりました。それには何か書いてあります。

ハンジ「どうしたの？ 見てる物は…本？ 本が欲しいの？」

あれは本と言うそうです。表紙には巨人の絵が描いてあります。巨人の事が書いてあるのでしょうか。私はきつとあの本が欲しいと思ったのでしよう。

レイラ コクッ

ハンジ「分かったあれも買ってあげるよ欲しいものが出来て良かったね」

ー ー ー 買い物中ー

ハンジ「他にも色々あったからついでに買ったよ。これで文字の練習が出来るね」

書いてあったのは文字ですか。文字の練習をすれば会話が出来るかもしれせん。この時初めて楽しみを実感出来ました。

2話

——団長室——

ガチャ

ハンジ「ただいまー」

エルヴィン「おかえり」

リヴァイ「楽しめたか？」

レイラ「コクッ」

リヴァイ「そうか」

ミケ「本も買ったのか？」

ハンジ「うん！レイラが文字の練習したいっぽかったから買ってあげた」

レイラ「コクッ」

エルヴィン「なら早速練習するか」

どうやらエルヴィンさんが教えてくれるそうです。楽しみです。

レイラ「コクッ スタスタ チョコン」

私はエルヴィンさんに本を渡しエルヴィンさんの膝の上に乗りました。そして文字

を教えてくださいました。

エルヴィン 「まずこの文字は」

レイラ コクッ

リヴァイ 「楽しそうだな……」

ハンジ 「もしかして嫉妬してる？」

リヴァイ 「そんなわけねえだろ」

ミケ 「本当か？俺の鼻は嘘じゃないと言ってるが」

リヴァイ 「……削ぐ」 シャキ

私が文字を教えてもらう間、あちらは楽しそうに会話していました。私は今日初めて楽しいを感じる事が出来ました。ここに来てまだ2日ですがここに来て良かったです。

—————

—————

—————

—————

そんなこんなで半年。エルヴィンさんから文字や言葉をハンジさんから巨人をミケさんから格闘術を教えてもらいました。リヴァイさんはいつも一緒にいてくれます。

傷は治りましたが跡がいくつか残っています。治らないものもありました。私は次

第に文字を読み書きできるようになってきました。本がとても好きになりました。ですがあの頃の私は表情がなかったのです。しかしあの頃の私はこれが普通と思つていました。私は私が異常と思つてなかったのです。

ミケ「レイラ、対人格闘するか？」

※立体機動はやっていません

レイラ コクッ

ミケ「分かった。今日は新しい技をやるぞ」

コクッ

マズハココロコウヤツテ

リヴァイ「…」

ハンジ「リヴァイまた嫉妬？」

リヴァイ「いや：レイラが来てから半年ほど経つが」

ハンジ「ちよつと待つてそれ長くなるやつ？」

リヴァイ「エルヴィンもミケもお前もあいつのためにいろいろ教えたり支えたりしているが」

ハンジ「話聞いてよ無視しないでよ」

リヴァイ「俺は一緒にいるだけだ何もしてねえ」

ハンジ「……なんとゆうかレイラと会ってからリヴァイのキャラが壊れてない？ 気のせい？」

リヴァイ「そんなもんでもいい」

ハンジ「これかなり重要だと思うけど……まあとにかくレイラのために何かしたいと」
リヴァイ「そういうことだ」

ハンジ「一緒にいるだけでいいんじゃない？ 私は好きなことをしてるだけだよ。ミケとエルヴィンも得意だから教えてる感じじゃない？」

リヴァイ「……俺は掃除ぐらいか」

ハンジ「でも一番感謝してるのはリヴァイだと思うよ確か引き取って提案したのリヴァイでしょう？」

リヴァイ「確かにそうだが……」

ハンジ「ここに来なかったら巨人はあんまり知らなかっただろうし、対人格闘は教えてもらえなかったし」

リヴァイ「まあそうだろうな」

ハンジ「そもそも言っちゃなんだけどレイラは他の子供といると異常者扱いされてたと思うよ」

リヴァイ「……そうだな」

ハンジ「だからリヴァイと一緒にいるだけでレイラのためになると思うよ。保護者代わりと考えていいんじゃない？」

リヴァイ「……………ありがとう」

ハンジ「……………マジでキャラ崩壊してない？」

レイラ シュ ガシツ ブオン

ミケ ドンツ

リヴァイ「！」

ハンジ「すごい！ミケを倒しちゃった！」

ミケ「いてて…強くなったなレイラ」

レイラ コクツ

『ミケさんの教え方が上手だからです。』

※『』は紙に書いた文字です

ミケ「ありがとうな。そろそろお昼の時間だな…行くか」

レイラ コクツ

ミケ「そこにいる2人も一緒に行くか？」

ハンジ「行くよーレイラはすごいね。ミケを倒しちゃうなんて」

ミケ「俺も驚いた。こんな短期間でやられるとは…」

レイラ スタスタ

『一緒に行きませんか。』

リヴァイ「ああ……レイラは今幸せか？」

リヴァイさんがこんな質問をしてきました。一体2人で何を話してたのでしょうか。答えは決まっています。私は今

レイラ コクッ

幸せです。

リヴァイ「そうか」フツ

リヴァイさんが笑いました。私は何かおかしな事をしたのでしょうか。

リヴァイ「そういえばレイラは対人格闘の才能がありそうだな今度俺が教えてもいいか？」

レイラ コクッ

少し楽しみです。ですが私は表情が動きません。この時の私はまだ本当の幸せではなかったのです。しかしこの時の私は普通の女の子と思い続けているのです。少し不幸な普通の女の子だと思い続けているのです。

—————

—————

――
――

リヴァアイさんと対人格闘をやるようになってから半年。今日は訓練兵団で解散式だそうです。そして私がここに来て1年経つ日でもあります。明日は壁外調査だそうです。

ハンジ「今日は解散式だよ。何人ぐらい入ってくれるかな？」

ミケ「壁が壊されたからな…残るかどうか…」

リヴァアイ「今は明日の壁外調査に集中していいんじゃないか？」

エルヴィン「リヴァアイの言う通りだ」

リヴァアイ「ところでレイラはどこだ？」

ハンジ「確かリヴァアイの部屋で本読んでなかった？」

ミケ「300冊ぐらい持つてるよな…」

リヴァアイ「レイラは収納をうまく使うから部屋は散らかってない。さすがだな」

エルヴィン「最近本屋の本を読み尽くしてきてるらしいぞ」

ミケ「対人格闘に関しての本も読んで最近独自の技を編み出しているみたいだしな」

ハンジ「まさかここまでハマるとはねえ」

リヴァアイ「…あれから1年経つたが…声は相変わらず出ねえし表情は変わらねえし

…どうにかしてやりてえ」

エルヴィン「何かが足りないのだろうが…見当がつかないな…」
ガチャ

ハンジ「レイラどうしたの？」

私は知らない言葉があつたのでエルヴィンさんに聞きに来ました。何か深刻な話でもしてたのでしょうか。少し浮かない顔をしていました。

エルヴィン「分からない字があつたのか？」

レイラ コクツ ピラツ

私は頷いてページを開き指を指します。知らない言葉です。

ミケ「……分厚いな……」

リヴァイ「知らん単語ばかりだ……」

エルヴィン「これは……私も知らないな…今度調べに行くか」

レイラ コクツ

ハンジ「これってどんな話なの？」

レイラ スッ

私は本のタイトルを見せます。この本はとても面白いのです。

ハンジ「えーと…なにになに…」 自然哲学の数学的諸原理 …………… 内容分かるの？」

レイラ コクツ

なんとなくですが分かります。他の人は読まないのでしょうか。この時の私は気づいてなかったのです。私は私以外の子供と話した事がないのです。本を読んでいますが本物は見たことがないのです。

——次の日——

レイラ フリフリ

『無事に帰ってきてください』

ハンジ 「うん無事に帰ってくるよ」

リヴァイ 「行ってくる」

ガチャ

——そういえば壁外調査の日私が何をしているのか話していませんでした。私は基本的に本を読んだり掃除をしています。ですが今日は違いました。なぜなら壁が壊されたのですから。すごい地震でした。しかし私は怖くありませんでした。なぜなら異常だったからです。何事もなかったかのように過ごしていました。

——

——

——

――

ガチャ

リヴァハン「レイラ！」ハアハア

リヴァアイさんとハンジさんが帰ってきました。何故か息が上がっているようです。

ハンジ「大丈夫？怖くなかった？」ガシッ

リヴァアイ ナデナデ

心配していたのでしよう。わざわざ走ってきてくれたのです。ですがこの時の私には何をしているのか分かりませんでした。心配の概念が感覚的に分からなかったのでしょうか。この時の私は人に同情するとゆう事が分からなかったのです。きっと私はこう考えていたでしょう。気持ち悪いと。

レイラ「……」

ハンジさんは私を抱き「大丈夫」と言いリヴァアイさんは頭を撫でています。私は文字を書くことが出来ません。抱かれた時の対処法は知りません。

――5分後――

ガチャ

ミケ「ハンジ、レイラが苦しんでる」

ハンジ「あ！ごめん」バツ

レイラ

『私は大丈夫です。怖くなかったです。何が起きたんですか。』

ハンジ「実は超大型巨人が現れてウォールローゼに穴を開けた。と思つたら確かエレイン・イエーガーつて名前の訓練兵が巨人化出来る事が発覚し、大岩で穴を塞いだらしい」
素直に驚きました。人が巨人化出来るなんてびっくりしました。すぐく見てみたいと思ひました。すぐく興味がありました。そして超大型巨人や鎧の巨人も知性があるのかも興味がありました。

レイラ

『すぐく見てみたいです。』

ハンジ「巨人化できる子を？」

レイラ コクッ

ハンジ「エルヴィンが接触許可をもらいに行つてるから、許可が下りたら行く？ エルヴィンとリヴァアイで行くんだったって」

リヴァアイ「俺は構わねえが」

レイラ コクッ

ミケ「楽しみか？」

レイラ コクッ

それはそれは楽しみで仕方なかったです。思わず笑えるぐらい楽しみでした。それでも私は笑いません。なぜ笑えないのでしょうか。この時の私はまだ笑えてないことに気づいていません。いえ気付いていたかもしれないかもしれません。ですが私は気づかないふりをしていたのでしょうか。

――3日後――

エルヴィン「ようやく接触の許可が出たレイラも行くんだよな」

レイラ コクツ

リヴァイ「俺の馬に乗れ」

レイラ コクツ スタスタ

私はリヴァイさんの馬に乗りリヴァイさんと2人乗りをしました。私が前方でリヴァイさんが後方です。私は上手に乗れません。私用の馬がないからです。

――審議所――

この地下に巨人化できるエレンさんがいるようです。地下室に入るのはとても久しぶりでした。思えばこの時の私の目は死んでいたかもしれない。エレンさんは鎖で繋がれ昏睡していました。

憲兵「念の為その紙と鉛筆は預かる」

憲兵の人に取りられてしまいました。お話が出来ません。ここに来てから数分後エレ

ンさんが起きたようです。

エレン「zzzzzzz……あ……」

エルヴィン「君がエレン・イエーガー君だね。私は調査兵団団長のエルヴィン・スミ
スだ」

リヴァイ「リヴァイだ」

エレン（調査兵団のトップと人類最強と……あの女の子は誰だ？）

エルヴィン「彼女はレイラ。事情があつて声が出ないのと調査兵団が引き取つた」
レイラ コクッ

エレン（調査兵団がそんなことするとは……）

エルヴィン「早速だが昏睡していた3日間の出来事について省略く何か質問はある
か？」

エレン「……ここは……何処ですか？」

エルヴィン「地下室とだけ言つておこう……本題に入る……」 スツ

エレン「その鍵は……」

エルヴィン「あとで返すよ。君の記憶ではシガンシナ区にある君の家の地下室に巨人
の謎がある……合つてるかい？」

その話は初めて聞きました。エレンさんの家に行つてみたいです。

エレン「はい…父が言っていました」

リヴァイ「お前の親父は行方不明…随分都合のいい記憶喪失だな」

エルヴィン「リヴァイ彼が嘘をつく理由がないと結論付けただろう…とにかく今すべき事は君の意思だ」

エレン「俺の…意思ですか…」

リヴァイ「おいさつさと答えろグズ野郎お前がしたいことはなんだ」

グズヤロウとは何でしょうか。まだまだ知らないこともあります。それにリヴァイさんとエルヴィンさんの口調が少し違います。

エレン「調査兵団に入って…とにかく巨人をぶつ殺したいです」ニゴツ

巨人を殺したいと言っています。ここで私は私に対して疑問がありました。今まで私に優しくしてくれた人で巨人に殺された人がいます。私はその人達に1度でも悲しんだことがあるのでしょうか。

レイラ「…」

リヴァイ「ほう…悪くない…コイツの世話俺が責任持つ、上にはそう言っておけ…」
スタスタ ガシツ

リヴァイさんはそう言うのと牢屋の鉄の棒を掴みました。

リヴァイ「俺はコイツを信用したわけじゃねえ。裏切ったり暴れたりすれば俺が殺

す。上も文句は言えねえはずだ…俺以外に適役がないからな…認めてやるよお前の調査兵団入団を…」

とゆう事は私と一緒に暮らすのでしょうか。少し楽しみです。

リヴァイ「帰るぞ」スタスタ

レイラ コクツ フリフリ

エレン（俺にしているのか…？）フリフリ ジャラジャラ

リヴァイ「…」

エルヴィン「仲良くなれそうだな」

リヴァイ「ああ…」

レイラ スタスタ

―調査兵団本部―

ガチャ

ハンジ「おかえりーどうだった？」

レイラ

『一緒に暮らすことになりました。とても楽しみです。』

ハンジ「一緒にくらすことになったの!？」

エルヴィン「リヴァイの監視の元で暮らすことを条件にしようと思ってな」

リヴァイ「どこで暮らすんだ？」

エルヴィン「ウォールローゼ内にある古城で調査兵団特別作戦班、通称“リヴァイ班”を作り、そこで住んでもらう」

リヴァイ「分かったメンバーは誰だ？」

エルヴィン「リヴァイが決める」

リヴァイ「分かった。メンバーはペトラ、オルオ、エルド、グンタ、エレン、俺だ。レイラも行くが世話になるかたちで来てもらう」

レイラ コクッ

エルヴィン「俺は審議会はどうするか考えないと…」

ミケ「次の壁外調査も考え直さないと…」

ハンジ「実験何しようかな〜最っ高だよ〜」

レイラ

『ペトラさんという人達は知り合いですか。』

リヴァイ「壁外調査の時に部下になった。お前は会ったことないだろう」

私は食堂の時以外あまり人に会いません。私に関わろうとしている人はあまりいないのです。一方的に知られているとは思いますが。

—————

――

――

――

あれから数日後、エレンさんの裁判の日が決まりました。私は行きませんでした。部屋で待つことにしたのです。ソファアの上で待っていました。

ガチャ

ハンジ「たっだいまー」

エレン「いてて…」スタスタ

少し驚きました。エレンさんが怪我をしているのですから。なぜ怪我してるのでしょうか。

リヴァイ「レイラ、治療してやれ」

レイラ コクツ スタスタ ガサゴソ

私は救急箱を持っていききました。医学の知識が活かせて良かったです。見た感じ顔に腫れがあるのと多少痣がありました。

エレン「ありがとな。おかげで痛みが引いてきた」

レイラ

『どっついたしまして。』

エルヴィン「すまなかつた…しかし君の本心を伝え効果的にカードが切れた君に敬意を…これからもよろしくな、エレン」スツ

エレン「はい…よろしくお願いします」スツ ガシツ

リヴァイ「おいエレン」

エレン「は、はい！」ビクッ

どうやらリヴァイさんにやられた様です。カードとはこの事だったのでしようか。

リヴァイ「お前は俺のことを憎んでいるか？」

エレン「い、いえ…必要な演出として理解してます…」ビクビク

ハンジ「だからって限度があるでしょう。歯が折れたんだよ」スツ

リヴァイ「拾うな気持ち悪い」

なぜエレンさんが怯えているのか分かりません。その傷は日常の範囲内の傷でしたよ。この時から私はきつと自分が異常な事に気づき始めたのだと思います。

レイラ「…」

ミケ「大丈夫か？」

レイラ コクッ

ハンジ「ねえエレン口の中見せてよ」

エレン パコッ

ハンジ「え…もう…歯が生えてる…」

私も見てみたかったのでエレンの口の中を見ました。本当に生えています。しかし私は巨人化出来たら傷が治る。羨ましいと思わなかったのです。なぜなら私は怪我がない状態が少し不気味と感じていたのですから。

3話

パカラパカラ

オルオ「旧調査兵団本部古城を改装施設つてだけあつて…趣とやらだけは一人前だが…こんなに壁と川から離れた所にある本部なんてな」

私はあまり外に出かけないので森が珍しいです。本に載っていた花や草があります。とても楽しいです。

レイラ チラチラ

リヴァイ「楽しいか」

レイラ コクツ

リヴァイ「森とかあんまり来たことねえからな」

レイラ コクツ

リヴァイ「俺らが訓練してる間、この辺なら散歩してていいぞ」

レイラ コクツ

エレン（リヴァイ兵長、雰囲気全然違う…）

ペトラ（意外な面を見た）

エルド（楽しそうな兵長だな…）

グンタ（レイラって子すごいな）

オルオ（ガキが兵長と付きつきり…）

——旧調査兵団本部——

エルド「草が生い茂ってますね」

グンタ「中也埃っぽいです」

リヴァイ「それは重要な問題だ…早急に取り掛かるぞ」

—————

—————

—————

———

エレン「上の階の清掃完了しました。俺はどこで寝るべきでしょうか」

リヴァイ「地下室だ」

エレン「また…地下室ですか…」

リヴァイ「ああ、お前が寝ボケて巨人になったとして、そこが地下ならその場で拘束できる。そしてお前の身柄を手にする際に提示された条件の一つだ」

エレン「…」

レイラ

『掃除終わりました』

リヴァイ「分かった。エレンはここ、レイラはあっちをやつてろ。俺はお前らが掃除した所を見てくる」スタスタ

レイラ コクツ スタスタ

エレン「はい…」

ペトラ「失望と驚きの顔だね」

エレン「はい!？」

ペトラ「珍しい反応じゃないよ。現物のリヴァイ兵長は…小柄だし、神経質で粗暴で近寄りがたい。そしてレイラという時は優しい」

エレン「いえ…俺が意外だと思ったのは、上の取り決めに対する従順な姿勢です…レイラについても何故引き取ったのでしょうか…」

ペトラ「どちらも詳しくは知らないけど…リヴァイ兵長は調査兵団に入る前は地下街で有名なゴロツキで、エルヴィン団長の元に下る形で調査兵団に連れてこられたと…レイラはリヴァイ兵長が引き取りたいと提案したとしか…」

エレン「リヴァイ兵長とレイラって謎なんですな…」

リヴァイ「おいエレン」スタスタ

エレン「は、はい！」

ペトラ サツサツサツ

リヴァイ「全然なつてない全部やり直せ」

エレン「はい!!」タタタタ

リヴァイ スタスタ

リヴァイさんがこちらに来ました。今回は合格でしょうか。ここも丁度終わつたところです。リヴァイさんのおかげで掃除が上手になりました。

リヴァイ「合格だ。ここも丁度終わつたみたいだな、ここも合格だ。寝る場所はどこがいいんだ？」

レイラ

『リヴァイさんの部屋でも1人でもいいですよ』

リヴァイ「なら1人部屋にするか」

レイラ コクツ

リヴァイ「ここにするか？」

レイラ コクツ

リヴァイ「分かつたベッドの用意でもしてろ。掃除はもうしなくていい」スタスタ
1人部屋は初めてです。私の部屋にはあつという間に本で壁が埋まりました。私は

変わらず本を読んでいました。1人でもリヴァアイさんがいても変わらなかつたのです。

――――

――――

――――

――

ガチャ

リヴァアイ「レイラ、食事の時間だ。降りるぞ」スタスタ

食事の時間になりました。今日からどんな食事なのでしょう。楽しみです。悲しいと感じないのに楽しいは感じたのです。何故でしょうか。

レイラ コクツ スタスタ

――食堂――

リヴァアイ「待たせたな」

エルド「丁度終わったところですよ」

とても美味しそうな匂いがします。誰が作ったのでしょうか。私はリヴァアイさんの前に座りました。

ペトラ「揃ったので食べましょうか」

リヴァアイ班「いただきます」

レイラ パクツ

とても美味しかったです。本当なら表情が緩んでいたでしょう。ですが私はいつも通りの無表情です。

ペトラ「兵長、どうですか？」

リヴァイ「悪くない」

ペトラ「嬉しいです」ニコツ

リヴァイさんが褒めています。とても珍しいです。そこで私はふと思いました。最近読んだ本で似たようなシーンがあったのです。親が子を褒めるシーンです。なぜ思い出したのでしょうか。そして私は親に褒められたことがあるのでしょうか。

—————

—————

—————

—————

エルド「30日後には大規模な壁外遠征を考えてるらしい。それも新兵を早々に混じえる」と

グンタ「…そりゃ本当か？ただでえ、今回の巨人の襲撃は新兵に堪えただろうによ」

オルオ「ガキ共はすっかり腰を抜かしただろうな」

皆さんどうして巨人が怖いのでしょうか。あの頃の私はこんな事を考えていたでしょう。しかしもっと素朴な疑問があったはず。なぜ私は巨人が怖くないのかを。私はどうして恐怖を感じないかを。

ペトラ「本当ですか兵長」

リヴァイ「エルヴィンのことだ：俺達より多くの事を考えてるだろう」

エルド「これまでとは状況が異なりますからね：犠牲を払って進めてきたマリア奪還ルートが一瞬で白紙になったかと思えば、突然全く別の希望が降って湧いた」チラツ

エレン「…」

エルド「…未だに信じられないんだが：” 巨人になる ” っていうのはどういうことなんだ：エレン？」

エレン「…その時の記憶は定かではないんですが…：きつかけになるのは自傷行為ですこうやって手を…」

私は要らないところで素朴な疑問が出てくるのです。こんな感じに。

レイラ

『それは誰かに教えてもらったのですか。』

エレン「いや：俺もよく分からない：なんで知ってたんだろう…」（レイラって誰に対しても敬語なのか：字が無駄に綺麗だな…）

リヴァイ「誰も報告書以上のことは知らない……まああいつは黙ってないだろうが……
夕にいじくり回されて死ぬかもな、お前」

エレン「あいつとは……？」

ガチャ

ハンジ「こんばんはー、リヴァイ班の皆さん。お城の住み心地はどうかかな？」

リヴァイ「あいつだ」

ハンジさんが来ました。エレンさんに会いに来たのでしょうか。どちらにしてもハンジさんの話が聞きたいです。

エレン「ハンジ分隊長」

ハンジ「レイラにはいい情報だよ。今、街で捕らえた2体の巨人の生態調査を担当しているんだけど、明日の実験にはエレンにも協力してもらいたい。その許可をもらいに来た」

それはとても楽しみです。今度はどんな巨人でどんな実験をしたのでしょうか。しかもエレンさんに協力してもらえたらいろんな事が分かりそうです。

エレン「実験ですか？俺が何を……？」

ハンジ「それはもう……最っ高に滾るヤツをだよ」

エレン「？あの……許可については自分では下せません。自分の権限を持っているのは

自分ではないので」

ハンジ「リヴァイ？明日のエレンの予定は？」

リヴァイ「……庭の掃除だ」

ハンジ「ならよかった決定!!」ガシツ

ハンジ「エレン！明日はよろしく」

レイラ

『私も行っているんですか。』

リヴァイ「……気をつけろよ」

レイラ コクツ

エレン「しかし巨人の実験とはどういうものですか？」

オルオ「やめろ！聞くな！」ボソツ

エレン「？」

どうやらエレンさんも聞きたいようです。やはり巨人は面白いですからね。

ハンジ「ああ……やっぱり聞きたそうな顔してると思った……」

ガタツ

リヴァイさん達が帰っていきました。そんなにつまらないでしょうか。

エレン「？」

ハンジ「そんなに聞きたかったのか…：しようがないなあ。聞かせてあげないとね今回捕まえた達について」

――次の日――

ハンジ「…なので今回の実験では新たに得られた情報は無いね。今、話した事はエレンもレイラも知ってたよね？」

少しの間でここまで実験をしていて凄かったです。しかし気になったのが座学の範囲が狭い事でした。

エレン「はい…：全部知っていました」

レイラ コクッ

ハンジ「なので、ここからは私独自の推測を交えてもう一度解説するよ」

レイラ コクッ

エレン「はい!?あの…：もう…：」ビクッ

ハンジ「まず巨人との意思の疎通に関して」

ガチャ

モブリット「ハンジ分隊長はいますか!?被験体の2体は何者かに殺されました!」

ハンジ「え!?!」ガタッ

この時私は悲しむべきなのです。この前は不本意に殺されてしまいましたが、今回は

故意に殺されたのです。ハンジさんは泣いていました。私も泣くべきだったのです。なぜ私は悲しまないのでしょうか。この時の私は疑問を感じました。

ーレイラの部屋ー

レイラ ペラツ ペラツ

今私は親子関係についての本を読んできました。昨日ふと思い出したシーンです。

娘「卵焼き作ってみたよ！食べて食べて！」

母「分かったわ：いただきます」パクツ

母「すごく美味しいよ上手にできたねえらいえらい」ナデナデ

娘「えへへ」

本来なら優しいお母さんが娘を褒める暖かいシーンなのです。ですが私は分かりませんでした。なぜ焦げた卵焼きを美味しいと言ったのでしょうか。この時の私には愛情が分からなかったのです。

コンコン ガチャ

まだお昼の時間ではありません。誰でしょうか。

エレン「うわ！本の量すごいな」

エレンさんでした。何の用事でしょうか。そして用事が終わったら聞いてみましょう。このシーンについて。

レイラ

『何の用事ですか』

エレン「少し、気になった事があってな…歳いくつ何だ？」

どうしてそんな事が気にたなったのでしょうか。私は7と手で表しました。

エレン「7歳か…なんで敬語何だ？」

困惑しました。私の中では敬語である事が普通なのです。相手が誰であろうと敬語だったのです。この日から私は私が普通でないことに気づいたのです。私はこの一言で全てが変わったといっても過言ではありません。

レイラ

『普通は敬語ではないのですか。』

エレン「いや…それくらいの歳で敬語だから、どんな環境で過ごしてたのかなと思つて…」

レイラ

『私は家族にお金で売られて貴族の方に拷問されただけです。』

エレン「!?!」（それだけの事をされて”だけ”!?!…………リヴァイ兵長は知ってるのか?）

私は何か変な事を書きましたか。エレンさんはとても驚いてるようです。何故で

しょうか。そういうえば誰も話したことがありません。誰にも聞かれなかったのです。

エレン 「悪かったな…辛いこと、思い出させて…」

今度は私が驚きました。私は辛いことではなく日常だと思っていたのです。これも日常なのか不思議だったのとなぜ褒めたのか分からなかったのでこのシーンについて聞いてみます。本を指を指しながら。

レイラ

『なぜお母さんは娘を褒めているのですか。』

エレン 「?えーと…なにに…:…:…:愛情じゃないか?」

愛情。そこで私は思いました。私は親から愛情を注がれた事があるのでしょうか。そして私には愛情があるのででしょうか。私は同情や心配と同様に感覚的に分からなかったのです。なぜ私は情がないのでしょうか。

レイラ 「?」

エレン 「えつと…:愛情っていうのは」

いえいえ違います。私は私に対して疑問を感じているのです。愛情の概念は分かるのです。感覚的に分からないだけです。私は首を横に振ります。

レイラ フリフリ

『もう大丈夫です。もう帰っていいですよ。』

エレン「そ、そうか？じゃあまたお昼な」フリフリ

—————

—————

—————

———

今リヴァアイさん達は訓練をしています。私は訓練を見ました。

リヴァアイ「今日は立体機動の訓練だ。いつも通りにやれ」

リヴァアイ班「ハッ！」ダッ

どうやら立体機動装置の訓練のようです。エルドさんとグンタさん、ペトラさんとオルオさんのコンビネーションが凄かったです。あの頃の私は立体機動装置に憧れました。

リヴァアイ（あいつ暇そうだな…次は対人格闘にするか…）チラッ

1時間ぐらい経った後でしょうか。終わったようです。次は何をするのでしょうか。

リヴァアイ「次は対人格闘をする…レイラ、こっちに来い」

何故でしょうか。確かにやってみたいですが訓練ですよ。とりあえず行ってみます。

レイラ スタスタ

リヴァアイ「レイラを相手にしてもらおう」

リヴァイ班「は!？」

エレン「ちよつと待つてくださいい！」

ペトラ「相手は子供ですよ!？」

エルド「流石に無茶では……」

グンタ「これは訓練ですよ！」

オルオ「何故こんなガキを相手に……」

私も少し驚きました。ですが少し楽しみです。今までミケさんとリヴァアイさんしかやった事がないので。精銳の人は果たしてどれぐらい強いのでしょうか。

リヴァイ「子供だからといって、手加減しないほうがいい。とつとと始める」

リヴァイ班「は、はい！」

オルオ「おいエレン。お前が行け」

エレン「こういう時こそ先輩からやって下さいよ」

エルド「子供相手だと気が引けるな……」

グンタ「なぜ、リヴァイ兵長はレイラを指名したんだ？」

ペトラ「強そうには見えなけれどね……」

リヴァイ「とつとと始めねえか……ペトラ、お前が行け」

ペトラ「私ですか…分かりました」

「どうやら最初はペトラさんが相手のようです。」

ペトラ「い、行くよ」

レイラ コクッ

ペトラ ダッ

レイラ シュ ガシッ クルッ

ペトラ「！」バンッ

エレン「ペトラさんが…負けた…？」

エルド「一瞬で投げた…」

グンタ「何が起きたんだ…」

リヴァイ「…体鈍ったか？」

レイラ コクッ

リヴァイ班「は!？」

リヴァイ「最近ミケとやってないからな…俺も忙しかった…」

レイラ コクッ

エルド「ミケ分隊長とやっていたのか…納得した」

グンタ「さっきの強さで体が鈍った…本来ならもっと強いのか…」

オルオ「まじかよ…」

ペトラ「いてて…」

エレン「レイラ！さっきのどうやったんだ？」

レイラ

『技を受けるのが一番早いと思います。』

エレン「じゃあやろうぜ」

レイラ コクッ

エレン「行くぞ」ダッ

レイラ シュ ガシッ クルッ

エレン「うわ！」バンッ

レイラ

『分かりましたか。』

エレン「いてて…なんとなくだが…」

レイラ

『今度はちゃんと勝負したいです。』

エレン「分かった…俺も本気でやる」

レイラ コクッ

エレン ダッ ゲシッ

レイラ シュ ドガッ

エレン(バランスが!) ドテッ ゴロゴロ

エレン「強すぎだろ…」

リヴァイ「次は5対1でやるか？」

レイラ コクッ

グンタ「行くぞ」

リヴァイ班 ダッ

——1分後——

リヴァイ班 ボロボロ

あまり強くありません。私が強いのでしょうか。リヴァイさんと久しぶりにやりた
いです。

リヴァイ「俺とやるか？」

レイラ コクッ

——

——

——

ー
ー
負けました。やはりリヴァアイさんは強いです。今日から対人格闘は私対リヴァアイ班でやる事になりました。リヴァアイさんとは暇な時にやります。

今日はエレンさんで実験をするそうです。私はもしもの時のため、私の部屋から覗く形で見ることになりました。ですがどうやら失敗したようです。私は本を読んでいます。

レイラ ペラツ ペラツ

今読んでる本は対人格闘に関しての本です。先ほど負けてしまったので読み返しています。

レイラ ペラツ ペラツ

ピカツドーン

何が起こったのでしょうか。大きな音がしました。窓から見上げてみます。するとエレンさんの右腕が巨人化してました。私は急いで階段を降ります。

ペトラ「兵長！エレンから離れて下さい！近すぎます！」

リヴァアイ「いいや、離れるべきはお前らの方だ。下がれ」

ペトラ「なぜです!?!」

リヴァアイ「俺の勘だ」

エルド「どうしたエレン!!何かしやべれよ!」

そんな声が聞こえてきます。ペトラさん達はエレンさんに刃を向けています。私はその中に入ります。

リヴァイ「レイラ、どうしてここに…」

私は無我夢中にエレンさんの巨人化した腕に触ります。

レイラ ジュウウウウ

皮膚のない所はすぐく熱いです。筋肉も人間そのものです。

タタタタ

ハンジ「エレン!!その腕触っていいいい!!レイラも触ってるしいいよねえ!!いいんでしょ!?!触るだけだから!!」

ハンジさんも来ました。ハンジさんも巨人化した腕に触ります。

ハンジ「うおおおおお」

ジュウウウウ

ハンジ「あつ…つい!!皮膚無いとクツツソ熱ツイぜ!!これ!!すツツげえ熱いツ!!」

モブリット「分隊長!!生き急ぎすぎです!!」

ハンジ「ねえ!?!エレンは熱くないの!?!その右手の繋ぎ目どうなってるの!?!すごい見たい!!」

すごくテンションが高いです。私もあれぐらいまでいかなくとも興奮しています。表情は変わりませんが。

—————

—————

—————

—————

あれからエレンさんは巨人化を解いてしまいました。そして巨人化する為に目的意識が必要な事も分かりました。ペトラさん達の誤解は解けたようです。私は思いました。私には怖いものがあるのでしょうか。そして私は誰かを敵視したことがあるのでしょうか。

4話

今日は壁外調査です。今日も一人で留守番です。今日はこんな本を読んでいます。

—————

リヴァイ「今日は巨人が少ないな……」

エレン「そうなんですか？」

ペトラ「エレンは初めてだからね」

エルド「確かにいつもより少ないですね」

—————

両親が死に、奴隷にされた男の子の話です。男の子は殴られ身体中が痛く、悲しかったり苦しんだりします。そこで女の子が助けてくれるお話です。

この本を読んで私はようやく疑問を感じました。

—————

パンツ

ミケ「エルヴィン、北の方向に向かっている巨人がいる」

エルヴィン「おかしいな」

ミケ「進路を変えるか？」

エルヴィン「そうだな…念には念を入れるか」

—————

私はいつから痛覚が無くなったのでしょうか。

私はいつから負の感情が無くなったのでしょうか。

私はいつから情が無くなったのでしょうか。

私はいつから人間ではなくなったのでしょうか。

ピカッドーン

—————

調査兵A「口頭伝達です!!壁が壊された可能性あり、進路を変え、壁を目指します!」
以上の伝達を左に回して下さい!!」

エレン「!？」

リヴァイ「聞いたかペトラ、行け」

ペトラ「は、はい！」

グンタ「壁が壊されただと…」

リヴァイ「レイラ…無事でいてくれよ…」ボソツ

—————

私は考えます。

なぜ痛覚がなくなったのかを。

私は考えます。

なぜ負の感情がなくなったのかを。

私は考えます。

なぜ情がなくなったのかを。

私は考えます。

なぜいつも無表情なのかを。

私は考えます。

なぜこんな自分になったのかを。

そして私は思い出します。

いつからこんな自分になったのか。

そしてさらに私は考えます。

なぜ私は機械や人形になったのでしょうか。

どのようにして今の私に……レイラ”になったのでしょうか。

ゴゴゴゴ

—————

ミケ「間違えない！壁が壊された」

エルヴィン「そのようだな、進路を変えたが巨人が少ない」

パンツ

ミケ「通常の巨人が多いとゆう事は奇行種は壁に行つたか…」

エルヴィン「無事だといいが…」

—————

私は切り離していたのです。

拷問されて痛かつたから痛覚を切り離しました。

悲しい…苦しい…怖い…辛い…負の感情を切り離しました。

親からの愛情が偽善でだったので、他人に対する思いやりが気持ち悪く感じ、情を切り離しました。

そして“レイラ”が生まれました。痛覚を切り捨て、負の感情を切り捨て、情を切り捨て、機械や人形にのような“レイラ”が出来ました。

ズシン　ズシン　ズシン

—————
エルヴィン「見えてきたな…巨人を倒しながら壁内に進み、1人でも多く人類を救え、
エレンは巨人化を許可すると伝達を回せ」

調査兵「ハッ！」

—————

レイラ「私は…何もかも…切り離してしまっていました…ごめんなさい…ごめんなさい…
い…ごめんなさい…」ポロポロ

封印していた感情が一気に溢れ出てきました。私は何度も私に謝り続けました。

ガシヤン

—————

リヴァイ「戦闘開始だ」

リヴァイ班「ハッ！」

リヴァイ（逃げろよレイラ）バシユ

—————

レイラ「もう忘れません…もう切り離しません…もう目を逸らしません…」ポロポロ
そしてやっと普通の人間になれた少女は、最後の最後まで不幸のまま

レイラ ニコッ

リヴァイ「笑った顔…出来るじやねえか…もつと…見せてくれよ…声も…聞かせてくれよ…もつと…幸せにしてやるから…」

ハンジ「リヴァイ…」

リヴァイ「また俺は…守れなかったのか…」

ハンジ「…」

リヴァイ「最後まで…幸せにしてやれなくて…すまない…」

『そんなことないですよ』

リヴァイ「！」

『あの時私を調査兵団に引き取らなかったら、私はもつと不幸でした。私はとつても幸せでしたよ。ありがとうございました』

リヴァイ「レイ…ラ…？」

ハンジ「え？リヴァイどうしたの？」

リヴァイ「声が…」

ハンジ「声？」

『リヴァイさん、貴方が責任を感じることはありません。本当は皆さんと喋りたかったです。私は幸せ者です。』

リヴァアイ「本当に…幸せだったのか…？」

『はい。私は嘘はつきません。リヴァアイさんは前を向いて生きてください』

リヴァアイ「前を…向いて」

『そして巨人を絶滅させて下さい。私はそろそろ時間です。それではさようなら。頑張ってください』ポロ

リヴァアイ「…ハンジ」

ハンジ「何？」

リヴァアイ「絶対に巨人を絶滅させるぞ…絶対に…」

これが幻聴だったのか、本当に声が聞こえたのかは誰も知る由もないことなのです。